論　文

エフィラの死霊神託殿
－遺跡の風景論の一つの試み－

野中　夏実

『オデュッセイア』 第X巻で、美しい魔女キルケは、オデュッセウスに死者の国を訪れ、テイレシアスの霊に、どのようにしたら故郷イタカに帰れるか助言をあおぐようにという。盲の予言者の棲むハデスの館に行くには、オケアノスの流れを渡り、ポプラや柳の生える地に上陸し、二つの川ペリフリゲトンとコキュトスが合流して大きな岩のところでアケロン川に流入している地点まで行かなければならない。そうしたら一キューピット四方の穴を掘り、そこに蜜と乳を、ついで甘い酒を、それから水を注ぎ、その上に白い大麦の粉を播き、そして死者の霊にむかって呪文を唱えなければならない。最後に牡羊と黒い牝牛を犠牲にして捧げなければならない。

次の巻で、オデュッセウスは仲間たちとともに、オケアノスの流れの果ての、キンメリオス人の棲む、太陽の光の届かない、霧に包まれた地にたどりつく。キルケの説明したとおりの場所にくると、オデュッセウスは剣で地面に一キューピット四方の穴を掘り、蜜と乳と酒と水を注ぎ、白い大麦を播き、そして力ない死者たちにむかって呪文を唱え、それが終ると、羊をとらえて穴の上で喉を切る。黒い血が流れ出ると、たちまち影のような死者たちが、きくに耐えない呻き声をあげながら群がってくる。うら若い乙女もいれば青年もいる。苦しい生涯を生きてきた老人もいれば、闘いに倒れた戦士もいる。だがオデュッセウスは、剣を片手に、予言者テイレシアスが現れるまでは、これらの霊を近づかせない。

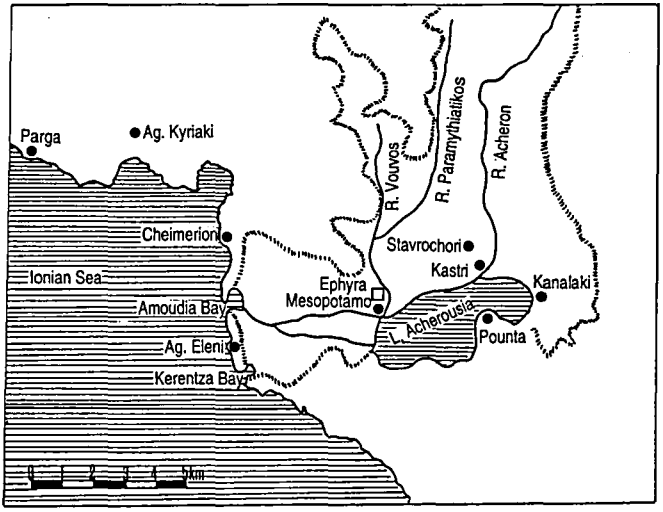
ホメロスがこのようにじつに鮮やかに、ドラマティックに描いている主人公のハデス訪問の場面は、ウェルギリウスの『アエネイス』、ダンテの「地獄篇」とつづく冥界降りの系譜の中で最も古いものである。これはもちろん伝説であり、ただの物語にすぎないけれども、そこには死者の国の地理的描写や、死霊託宣の具体的記述など、われわれにとって貴重な情報が含まれていることは否めない。

ソティリス・ダカリスのエフィラの死霊神託殿の発掘以来、ホメロスのハ

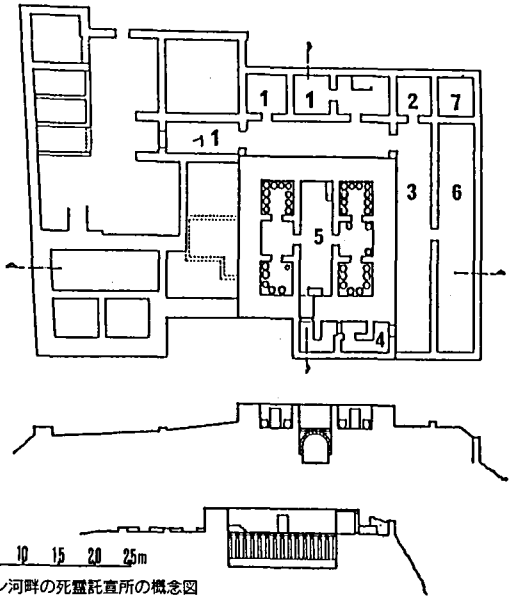
デスの館が、西北ギリシアに実在する特定の場所と対応していることは、ほぼ明らかであるといっていい。ギリシアの西北エピルス地方のイオニア海沿岸、アクティウムやニコポリスの遺跡のあるプレヴェザと、イタリアからの船の寄港するイグメニッツァのほぼ中間あたりに、メソポタモという小さな村がある。今日アムーディアあるいはスプランツァと呼ばれるアケロン川の河口から 5kmばかり内陸に入ったところである。じっさいパウサニアス[1]も指摘しているが、ホメロスの描写する土地とアケロン川流域地方とは、驚くほど類似している。地図を見ればわかるとおり、ヴーヴォスという川が、パラミディアティコスという川の流れを受け入れた後、メソポタモでアケロン川に流入している。アケロンは現在ファナリオティコスともいうが、ギリシア神話であまりにも有名な、死者たちの霊が冥界にいくために、渡し守カロンの漕ぐ舟で渡らなければならなかった川と同じ名前で呼ばれることが多い。ツキディデス[2]の一節にもあるように、この土地がエレアティス地方とも呼ばれたのは、一つにはこのあたりの地形を表す 'ελος(沼の意)からきているのだともいわれている。アケロン川流域地方は、まだ最近のことである干拓によって、ポプラや柳の生える肥沃な平野になったが、ストラボン[3]やツキディデスの証言からもわかるとおり、以前はアケルーシア湖という湖を形成していた。それは時とともに水量が減り、湖というよりは沼沢地と呼ぶべきものとなっていったにしても、19世紀にリーク大佐が訪れたときにはまだその名残りをとどめていた[4]。

メソポタモの村の北側には、クシロカストロと呼ばれる円錐形の丘があり、発見されたキュクロペス様式の城壁や土器片などから、そこは古代にはかなり名の知れていた町であるエフィラのアクロポリスだとされている。クシロカストロの南側 600m のところには、さらにもう一つ丘がある。この丘の上にある18世紀のアギオス・ヨアンニス修道院の建物の下に、ハデスとペルセフォネの信仰が行なわれていたとされる建造物が発見された。本稿では、この死霊神託殿遺跡のダカリスの発掘報告[5]にもとづいて、それがどういうものであったのかを理解した上で、一つの試みとして、このような託宣所と地形との関係、地形から受ける感覚と信仰心とのつながりといったことをすこし考えてみたい。その際、ギリシア世界に存在していた他の神託も視野に含めて考察を進めていきたい。

*



アケロン河畔の死霊託宣所の位置図



アケロン河畔の死霊託宣所の概念図
1. 暗い通路と部屋　2. 次の間　3. 犠牲羊がつれこまれる通路　4. 迷路になった南側通路　5. 主室　6. 外側通路への東側戸口　7. 清めの部屋

ソティリス・ダカリスは、1958年から1964年にかけて、メソポタモのアギオス・ヨアンニス修道院の丘を発掘した。その結果、修道院の建物の下に、名高いハデスの聖所の存在を裏づける、図のような構造をもつ別の建造物が出現した。

聖所の本殿ともいうべき建物は、縦横 22mの正方形で、四方を厚さ3.3mのみごとなポリゴナルの壁がとりまいている。壁は 3.25mの高さまで残っているが、その上は粘土をつなぎとした煉瓦積みになっていたようである。主室は、大きな中央広間《15×4.25m》の両側に三つずつ部屋があるという構造をもっている。中央広間の真下には、岩をくり抜いた地下室があり、縦横の長さは中央広間と同じだが、アーチ状の天井までの高さは4.3m、天井の厚さは 0.4mである。

聖所の訪問者はまず囲壁の北門から入り、左手に折れて北廊下にくる。左側の三つの部屋で、死霊との対面のための最初の準備として眠りと浄めの儀式が行なわれた。これらの部屋には、炉の跡があり、三つ目の部屋には浴槽の跡がある。そこからは貝殻や動物の骨、小さな豆、そしてさまざまな形の土器類や青銅貨幣――すべて紀元前 3世紀後半から 2世紀前半にかけてのもの――がみつかっている。次の廊下との境目には小石の山が残っているが、これは託宣伺い人が死霊の悪影響から身を守るために小石を投げる習慣があったためであろう。東廊下では羊などの家畜が焼かれ、そして犠牲にささげられたようだ。というのも床にいくつもの小さな穴があり、そこから石炭や灰や羊などの焼かれた骨が出てきたからである。それからラビュリントスとも呼ばれる迷路のような南廊下を経て、中央広間にいたるのだが、託宣伺い人が死霊との面会を果たすのは、その下の地下室においてであったらしい。

死者がじっさいどのような形で現れてきたのかはよくわかっていない。しかし鉄製の滑車やその付属品などがみつかったことから、何らかの仕掛けを使って、神官たちが地下室のいちばん奥に死者の霊が現れるように見せかけていたのだろうと推測されている。また訪問者のほうも、おそらく死霊神託殿の暗い部屋の中で何日かすごし、種々の儀式を経て心身に変化をきたした状態になってから死者の霊に対面したのであろう。発掘の結果みつかった豆や種の類は、それを食べると感覚が鈍り、幻覚症状を起こしやすくなる、という性質のものであった。したがって、託宣伺い人が、対面している影が本当に死者の霊であるという風に信じこみやすい心理状態になっていたことも十分考えられる。

死者との対面を終えると、訪問者は別のルートをたどって、身を浄めてから外に出たものとされる。

＊

エフィラの死霊神託殿とその託宣のプロセスをダカリスの報告をもとにして簡単に見てきたが、いったい人びとはどんな質問をたずさえてこのような託宣所を訪れたのであろうか。

ヘロドトスは、死霊託宣所としては最も古く、また古代においては有名であったこのエフィラの死霊神託殿について、次のような興味深い話を伝えている[6]。紀元前 7世紀末のコリントの僭主ペリアンドロスは、エフィラの死霊神託殿に使節を送り、亡き妻メリサに金をどこに隠したのかときくように命じた。メリサの幽霊は、現れたけれども何も答えようとしなかった。というのは、ペリアンドロスは、彼女を葬るときに着物もいっしょに焼かなかったからである。妻の望むとおりたくさんの豪華な衣裳を焼いた後、再び使いを送って伺わせると、今度は亡霊は金のありかを教えたという。ヘロドトスはまた次のような話も伝えている[7]。リディア王クロイソスは、当時知られていたすべての託宣所に使いを送り、どの神託が最も信頼できるかを試そうとした。彼はデルフォイ、フォキスのアバイ、ドドナ、オロポスのアンフィアラオ、レヴァディアのトロフォニオス、ミレトスのブランキダイ、そしてリビアのアモンの託宣所に人を遣わし、ある特定の日に自分が何をしているかという伺いを立てさせた。申し合わせた日に、彼は到底あてられないそうにないことをしようと、亀と仔羊を切りきざみ、それを青銅の蓋のある青銅の釜で煮ていた。これを正しく言いあてたのはデルフォイの神託だけだったので、最も信頼できるのはデルフォイの神託だということになった。

エフィラからそれほど遠くないドドナの神託では、託宣伺い人が質問事項を記入した鉛の小片がたくさんみつかっている。エフィラの死霊神託殿にもそのようなものがあったことは考えられないわけでもないが、たとえあったとしても、紀元前 168年にこの聖所がローマ人によって破壊されたときに、すべて焼けてしまったとされている。

ドドナでは、鉛の小片に託宣伺い人の質問事項を釘のようなものでひっかいて書き込むと、それを真中から内側に折り、裏側に依頼人の番号や名前の頭文字を記入した。祭司がそれらを巫女のところにもっていくと、巫女は樫の神木の葉のざわめきをきいて占った。現在ヨアニナの考古学博物館に所蔵されているドドナの鉛板のいくつかを見ると、神託は歴史に名を残したひとにぎりの人びとにかぎらず、かなり幅広く一般庶民にまでゆきわたっていたことがわかる。たとえば紀元前 5世紀後半の商人アリストンは、シラクサへ

行く時期を遅らせたほうがいいか、そしてそれは可能かどうかと質問している。リュシアスという男は、海外貿易が成功するかどうか、持船契約に署名すべきかどうかということを、ドドナの住民は何故ゼウスはこのように厳しい冬をもたらすのか、クレタの港湾都市ポイニケの住民はアテナ・ポリアスの神殿の位置を変えたほうがいいのではないか、と伺いを立てた。銀鉱の所有者ティモダモスは、金を商船隊と商売のどちらに投資すべきかとたずねたところ、「町に残り、商いを営むべし」という答えを得た。

われわれは、ヘロドトス、ツキディデス、ディオドロス、パウサニアスなどをよんで、神託所は有名な人物が歴史を決定するような重要な問題について伺いを立てるところであるというように思うことが多いかもしれないが、じつはかならずしもそうではなかったのである。神託伺いにはもちろん何らかの代償が支払われたことにはまちがいないが、神託は財力のある政治家だけのものではなかったことを、ドドナの鉛板は証言している。名もないごくふつうの人びとが、日常的な心配事、仕事や家族のことなど、つまり今日われわれがかかえているのとそうかわらない問題について、何らかの答えを得ようとして託宣所を訪れたのである。

エフィラの神託は死霊神託であり、ドドナの神託は樹木などの音による神託であったが、それだけでなく、ギリシア世界に存在していた神託はじつにさまざまであった。最も有名なデルフォイの神託は、巫者に神霊が憑依して伝える神託である。デルフォイでは、神託伺い人がまず羊や山羊などを犠牲にすると、神官がそれに水をかけてみる。犠牲獣が動きを示せば、それは吉兆であり、伺い人はアデュトン《聖所》に隣り合う部屋に通される。もし犠牲獣が何の動きも示さなければ、それは凶兆で、その日の神託伺いは中止となる。神託伺いの順番は原則として籤で決められたが、プロマンディアという神託伺いの優先権をもつ者は先になった。そして質問事項は鉛の小片に書かれた。神託を伝える巫女であるピュティアは、一時期若い少女であったときもあるらしいが、ふつうは50歳以上の女性であった。ピュティアはカスタリアの泉で身を浄め、カソティスの泉の水を飲む。水によって予言能力を授けられてから、月桂樹の葉を噛む。それからアデュトンの三脚台にすわり、神がかりの状態で予言した。ピュティアの口にしたわけのわからない叫びは、待機している詩人によって六脚韻文に翻訳された。その解釈のことばは多くの場合難解で、ときとして両義的であった。

レヴァディアのトロフォニオスの神託では次のような方法がとられていた、とパウサニアスは詳しく伝えている[8]。神託伺い人は何日間かある建物の中ですごした後、水で身を浄める。それからアポロ、クロノス、ゼウス、ヘラ、

デメテルの諸神に犠牲を捧げる。すると占い師がやってきて、犠牲獣の内蔵を調べ、トロフォニオスが快く迎えてくれるかどうか占う。神託伺いの晩にもまた牡羊を犠牲にして内蔵占いをする。このとき吉兆でないと、前の占いでいくらよい結果を得ていても意味がない。神託伺い人は、夜エルキナ川で体を洗ってもらい、オリーヴ油を塗ってもらう。それから祭司につれられて、まずレテの泉（忘却の泉）次にムネモシュネの泉（記憶の泉）の水を飲む。レテの泉から飲むのは、そのときまで心の中にあることをすべて忘れるためであり、ムネモシュネの泉から飲むのは、これから降っていって見るものすべてを記憶できるようにするためである。またダイダロスがつくったという像を見せられ、それを拝み、祈りを捧げる。そしてトロフォニオスのところに降りていく。

1.5mの高さの丸い石臼のような台があり、上に青銅の鎖でつながれた青銅の柱が二本立っていて、その間に扉がある。中は地中につくられた円錐形の洞窟になっていて、そこに梯子で降りていく。これは直径3m深さ6m足らずである。下につくと床と壁の間に幅0.6m高さ0.3mくらいの隙間がある。伺い人は床に横になり、手に蜂蜜のお菓子をもって、隙間にまず足を入れ、そして膝を押し込もうとする。すると体の残りの部分はそのままそこにひきずりこまれていく。それからは、未来のことを目で見るか耳できくかは人によってさまざまである。戻るときには同じ隙間から足から先に出てくる。こうしてトロフォニオスのところから戻ってくると、祭司たちはその伺い人を記憶の座につれていき、何を見てきたかたずねる。それがすむと、伺い人を彼の親しい者たちのもとへ引き渡す。伺い人は恐怖のためまわりで何が起こっているのかわからない状態であるが、すこしたつとまた意識をとり戻し、もとどおり笑ったりすることができるようになる。パウサニアスはこれは耳できいたことではなく、自分もじっさいに体験し、またトロフォニオスのところに降りていく人たちをじっさいに見て書いているのだという。

さらにもう一つアンフィアラオの例をあげておく。アンフィアラオの聖所では夢による神託が行なわれていたが、パウサニアスによるとそれは次のようであった[9]。神託伺い人は決められた祭式どおりのしかたで身を浄め、祭壇に名の書かれている神々のすべてに犠牲を捧げる。それから牡羊を犠牲にしてその羊毛にくるまって眠り、啓示となる夢を見る。祭司がそれぞれの夢を記して、伺い人に夢の象徴する意味を説明する。ついでにいうならば、これとよく似た方法で、エピダヴロスのアスクレピオンでは、夢の精神療法によって病気治療が行なわれていた。

最後に、ごく大雑把にではあるが、神託と地形ということについてすこし

述べてみることにする。

ひとつひとつのギリシアの神託の場所を地形の観点からすこし注意深く見てみると、それらは必ずといっていいほど高い山、川や泉、それから洞窟などによって特徴づけられていることがわかる。西にトマロス山（1974m）のそびえるドドナや、ムーサの住居といわれたパルナッソス（2457m）の南麓に、古くはナフプリアとヒュアムペイアと呼ばれた二つの崖の間に位置するデルフォイのように高い山が切り立っている土地では、われわれは崇高さや神秘的なものを感じる。また逆に、アルフェイオスののどかな流れとこんもりとしたクロノスの丘（123m）にいだかれたオリュンピアや、陽光が燦燦とふりそそぎ、小川のせせらぎが耳に快い木立にあるアンフィアラオ、またヴェラニディア山（858m）とハラニ山にいだかれたエピダヴロスのように、水の豊かな、開けた平野では、われわれは安心感や落ち着き、そして心ののびやかさをおぼえる。アンフィアラオやエピダヴロスのように、療養所的性格をもった聖所が、このように人が安心感をもち、のびやかさをおぼえるような土地につくられたのは、じつにふさわしいことのように思われる。デルフォイほど規模は大きくはないにしても、レヴァディアのトロフォニオスは、エルキナ峡谷の奥の、岩が切り立っているところにあって、やはりいくらか神秘的な雰囲気をそなえている。

ある地形を前にしたときのわれわれの感じ方を、このような漠然とした形でなく、たとえば樋口忠彦が『景観の構造』[10]の中で提案しているような科学的な方法で説明すればもうすこし説得力のあるものになったかもしれない。いずれにしても、ドドナを前にしたドイツ人の考古学者テオドル・ヴィーガントの「古代人は神託所を感銘深い場所に設けることをよく心得ていた」ということばは、本当にそのとおりだと思われる。

都市であれ、神殿であれ、他のどんな古代遺跡の場合にもそうであるように、神託の場所も、ただ無造作に決められたわけではなく、つねにその神託に最もふさわしい場所が選ばれたにちがいない。そのときに人が土地から受ける感覚は、たとえばシュリーマンがヒッサリクの丘に立ったときにこの下にトロヤの町が埋もれているはずだと確信したり、ソティリス・ダカリスがメソポタモの修道院と村の墓地のある丘を掘ってみようと決断したりするときの、いわば直感的な認識に通じるものがあるだろう。われわれは「人間と自然地形との間の敬虔ともいえる精神的な関係」ということを抜きにしては、神託の問題を扱うことができないように思われる。

アケロン河畔の死霊神託殿の場所を特徴づけているのは、二つの川の合流点にそそり立つ丘（岩）であるのはホメロスが描いているとおりである。二

つの川が合流しているという点ではオリュンピアと共通しているが、メソポタモではわれわれはオリュンピアで受けるようなのびやかさ、落ち着き、安心感といったものとは別の印象を受けるのである。現在は干拓によって肥沃な平野になったように見えるが、以前は、徐々に湖の水が減っていって沼沢地になった後も、湿気の多い、どことなく不気味さの漂う地域だったようである。アケロン川の南に位置するプーンタというところでは、沼の干拓が行なわれる前は、近くに燐光を発する水の流れがあり、毎年三月から六月までの間は気味の悪い地下水の轟きがきかれたという[11]。アケロンも幅のわりには深さのある川で、ホメロスの描写にあったように、岸には今でも柳やポプラが生えている。このような土地から受ける感じが、神託の発生に何らかの形で関連があることにはまちがいない。エフィラの死霊神託殿がアケロン川流域のこの土地にあるのは、必ずしも偶然のことではないのかもしれない。

注

1. Pausanias I.17.5. 「キヒロスの近くにはアケルーシア湖、アケロン川、それから忌むべきコキュトスの流れがある。ホメロスはおそらくこの土地を見て知っていたにちがいない。そしてハデスについての彼の大胆な詩の中で、テスプロティア地方の川の名前を使ったのであろう。」
2. Strabo 7.7.5. 「それからケイメリオン岬、そしてアケロン川の注ぐグリキス・リミンがある。アケロン川はアケルーシア湖をとおり、いくつかの川の流れを受け入れて、湾に豊富な水量をもたらすからである。湾の上には、テスプロティア人の町キヒロス、すなわちもとのエフィラがある。」
3. Thucydides I.46 (これは紀元前 433年の戦いの前夜、コリント勢の停泊の模様をかいたものである。)「レフカダからやってきた一軍はコルキュラの対岸に着き、テスプロティア地方のケイメリオン岬に停泊した。そこには港があり、その上に海から離れたところにテスプロティアのエレアティス地方のエフィラという町がある。近くにアケルーシア湖が海に注いでいる河口がある。この湖の名前は、テスプロティア地方を流れて湖に注いでいるアケロン川の名前からきている。」
4. W.M. Leake, *Travels in Northern Greece*, London, 1835, vol.4, chap.35, Epirus.

"There seems no reason to doubt that the Gurla, or river of Suli, is the *Acheron*, the Vuvo, the *Cocytus* of antiquity, and the great marsh or lake below Kastri, the *Acherousia*. The course of the Acheron through the lake into the Glycys Limen accords perfectly with the testimony of Thucydides, Scylax, Livy and Strabo, and the disagreeable water of the Cocytus is noticed by Pausanias."

5. S. I. Dakaris, *The Antiquity of Epirus--The Acheron Nekromanteion. Ephyra. Pandosia. Cassope.* Apollon Publishers, Athens.
S. I. Dakaris, 'The Dark Palace of Hades', *Archaeology* 15, 1962, p. 85ff.
S. I. Dakaris, 'Das Taubenorakel von Dodona und das Totenorakel bei Ephyra', *Antike Kunst* Beiheft 1, p. 35ff.
6. Herodotus V. 92.
7. Herodotus 1. 46.
8. Pausanias IX. 39. 4.
9. Pausanias I. 34.
10. 樋口忠彦 『景観の構造ーーランドスケープとしての日本の空間』 技報堂、1975
11. N. G. L. Hammond, *Epirus*, p. 66.

Le Nekromanteio d'Ephyre
-- l'oracle sous son aspect topographique --

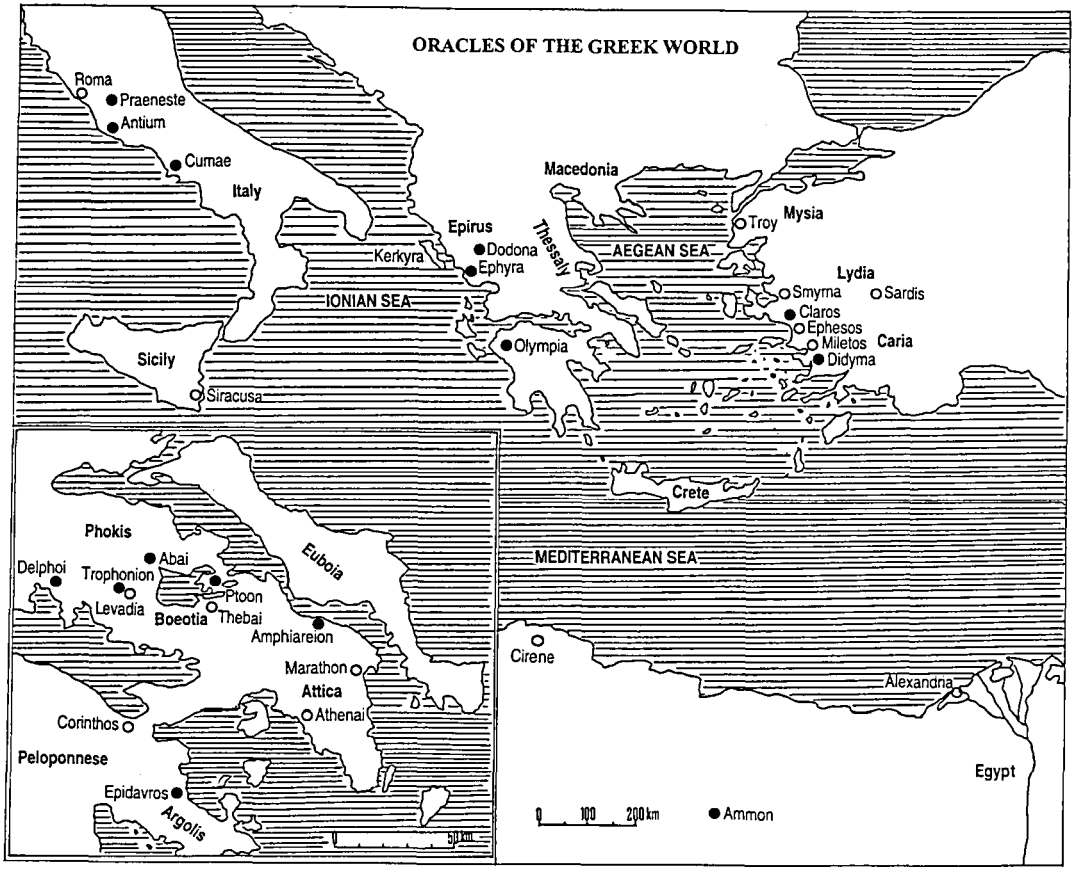
Dans l'XIe livre de l'*Odyssée*, Homère décrit assez minutieusement le Hadès, sombre et brumeux pays des morts que les rayons du soleil n'atteignent guère, et où au milieu des saules et des peupliers un grand rocher s'élève au confluent des fleuves Cocytus et Acheron.

Ce paysage sinistre, cependant, n'est pas tout à fait imaginaire; il semble avoir son correspondant réel dans la région d'Epire, sur le littoral de la mer Ionienne. A Ephyre, aujourd'hui Mesopotamo, à mi-chemin entre Preveza et Igoumenitsa, on a découvert une structure

identifiable avec le sanctuaire de Hadès et Persephone. Les rapports de M. Sotiris Dakaris, directeur des fouilles audit lieu, nous seront très utiles au cours de notre examen sur le Nekromanteio, ou l'oracle des morts, dont nous allons tenter de regarder aussi l'aspect topographique.

Les fouilles nous ont révélé une structure étonnante aux couloirs labyrinthines et aux murs polygonaux, qui date du 3ᵉ-2ᵉ s. av. J. C. La chambre souterraine, où se faisait l'apparition des ombres, est une grotte creusée dans le rocher naturel, de forme rectangulaire et voûtée. Aucune trace ne reste, en ce qui concerne la documentation des questions qu'on adressait aux ombres, dû probablement au fait que le sanctuaire a été incendié et détruit par les Romains en 168 av. J. C. Mais un grand nombre de fragments de plomb trouvés ailleurs, c'est-à-dire à Dodone, sur lesquels sont inscrites les diverses questions qu'on adressait à Zeus, nous montre que les hommes célèbres dont l'histoire a retenu les noms ne sont pas les seuls qui aient consulté les oracles. Cela nous laisse deviner que la situation à Ephyre a été plus ou moins pareille.

Enfin, en considérant en général les oracles sous leur aspect topographique, on s'aperçoit qu'ils sont, dans la plupart des cas, situés là où il y a une colline ou une montagne, une ravine ou une grotte, un fleuve ou une source. A Dodone au pied du Mt. Tomaros, ou à Delphes, dramatiquement situé sur le versant sud du Parnassos, on sent quelque chose de sublime, à la fois divin et mystique. Au contraire en Olympie, dans la paisible vallée de l'Alpheïos, ou à Amphiaraio dans un vallon ensoleillé et boisé où gazouille un ruisseau, on a le sentiment de la sérénité, de la tranquillité et du calme. Sans doute est-il vrai qu'il existe une relation intime entre les oracles et la topographie des lieux dans lesquels ils se trouvent. Le Nekromanteio d'Ephyre n'en fait pas une exception. La région de l'Acheron était un pays humide et lugubre où se voyaient des ruisseaux phosphorescents et où s'entendait le mugissement des eaux souterraines. Ce n'aurait pas été par pur hazard que les anciens ont établi, dans cette région-là, l'un des plus fameux oracles des morts.


ORACLES OF THE GREEK WORLD
Roma
Praeneste
Antium
Cumae
Italy
Sicily
Siracusa
Kerkyra
IONIAN SEA
Epirus
Dodona
Ephyra
Olympia
Thessaly
Macedonia
AEGEAN SEA
Troy
Mysia
Lydia
Smyrna
Sardis
Claros
Ephesos
Miletos
Caria
Didyma
Crete
MEDITERRANEAN SEA
Cirene
Alexandria
Egypt
Ammon
0 100 200 km
Phokis
Delphoi
Abai
Trophonion
Levadia
Ptoon
Boeotia
Thebai
Euboia
Amphiareion
Marathon
Attica
Athenai
Corinthos
Peloponnese
Epidavros
Argolis
0 50 km